第一部　建学の理念から藝術立国への道

徳山詳直（1930－2014）肖像画について〔望天館３階に展示〕

本学の創設者・徳山詳直を描いたこの肖像画は、本学キャラクターデザイン学科教授で2011年から15年まで学科長を務めた小野日佐子が描いたものです。肖像画家として世界的に著名な小野は、病に侵され生命の灯が消えゆくなか、全身全霊を打ち込んで本作品を描きあげ、完成を見た二か月後の2015年12月20日、永眠しました。最後の作品となったこの肖像画は、鋭さと慈愛を兼ね備えた眼光、意志的な口許と顎のラインなど、徳山詳直の特徴をみごとに捉えています。

一九七六年　秋

まだ見ぬわかものたちに　瓜生山学園設立の趣旨

この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた。

新しい世紀を目前にして、私たちは今日、大きな壁の前に立たされている。

科学技術と経済論理によって支配された現代社会は、それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、人間であることの意味を、根底から問われるに至った。

もはや、いわゆる国際化、情報化という手段のみによっては解決できない。

良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造こそ大切ではないだろうか。私たちは、芸術的創造と哲学的思索によって、この課題に応えたい。

いま、ここに、学園は新しい出発の時を迎えようとしています。

この時にいたって、私は、一つのためらいをかくすわけにはいかないのです。

今日の状況下で大学をつくることの物理的な困難についてはいうまでもありませんが、もっとも大切なこと、—それは、高い理想を掲げ、わかものたちを集める教育研究の場に当る者は、みずから未来への展望と、それを実現させていく深い思想を持たなければならない、集まってくる青春群像にむかって、「かく生きるべし」と堂々と語りかけるものを持っていなければならない、ということです。

わかものたちにはわかものたちの青春があります。私の青春時代を通じて培ってきたものが、きみたちわかものの人生にどれほどの糧となることができるか。—こう考えてくるとき、みずから恥入ることのいかに多いことか。

戦後の混乱期に青春を過した私にとって、それは、痛みと憤りなしに振り返ることのできない時代でした。と同時に、それ故にこそ一種の鮮烈な精神の高揚を味わいつつ生きてきたこともたしかです。

青春というものは、いつの時代でもそうしたものではないでしょうか。それならば、私は、私の夢と信念をわかものなかへ投げつけて、一緒にひたむきに生きて行くほかはない。

こう念じつつ、私はこれから一つの決意をきみたちに語ろうと思う。

美しくよそおいたまえ—美とは「心の姿」である。

この学園は、美について語り、美をさぐるものの集まりとして存在しています。

美を求めようとするものは、当然その人固有の美観でみずからをよそおい、自分のもっとも美しい姿を他に見せようとするものだし、他人の美しさに対してもすこぶる豊かに感動するものだと思うのです。

だから、この学園は常に美を意識し、美しさについて敏感なわかものたちの群がる場であるべきだと思うし、したがってまた自他の美をきそい合う場になることも当然だと思っています。

そこで誤解のないように言っておきますが、〝自己をよそおう〟という場合、ただ単に服装や容姿にこだわれというのではないのです。なぜなら、人間の美しさというものはそういったもので左右されるものだとは決して思っていないからです。

学生は本来貧しいものです。

ぜいたくをした美しさは大切だし、そうしなければ得られない美というものも当然存在しますが、おかねをかけない美、貧しさの美というのもまた立派に存在するし、ある意味では学生のみに許されたひとつの特権的な主張のしかたではないかとも考えます。

さらに言うなら、若さの美というものは物質というものをはねのけたところで完全に主張しうるものだとも言いたいのです。

また、人間の美しさというものは、その人格が美を意識すると否にかかわらず、いついかなるときでも、自然にあることがすなわち一種の美の表現でもありうるのです。

たとえば、恋愛に破れたとき、きみは激しい衝撃のなかで、生きていることを否定したいくらい悩むかも知れない。けれども、そのときの衝撃のあり方や悲嘆のあり方にも、深い人間的な美が内在すると思うのです。

肉親の死や自己の才能への絶望といった苦悩のなかにあっても、その人間の全的な表現の中にすぐれた美しさがひそんでおり、さまざまのよろこびやひたむきな勉学、友との語らい、遊びの一瞬の中にそれぞれの美しさは見い出せると思います。だからこそ、昔から芸術家たちはさまざまの手法で、くり返し人間を描いてきたのでしょう。

だれしもが自分を美しく見せたいという願望を持っている以上、そんな日常のくらしのすみずみにも美の原型がひそんでいるということ、美はおかねではなく人間の生きざまの総体の中にその原点が存在しているということを、よくわかってほしいと思うのです。

あそびたまえ、試みたまえ—より豊かさを求めて

大学というところは、学問の府であって真理の探求を志すところであると言われています。

いかにも、もっともな考えだけれど、これは大へん古典的であって現実の大学の姿をほんとうにあらわしていることばではないと思います。

現実の大学は、過酷な進学競争と愚劣な就職闘争の谷間に位置し、受験地獄からの浅薄な解放感と、将来の社会生活に対する危惧のなかでの一種の不安定期間、あるいは人生におけるかりそめの期間であって現代学歴社会に入りこ

むための資格取得期間にしか過ぎなくなってきています。

真理の探求といっても、それを標榜する先輩諸賢が、どんなにこの国や世界を荒廃させたことでしょう。戦争を起こし、人間を傷つけ、公害を許し、いかに汚辱に満ちた生活をしてきたかを私たちはまざまざと見てきたのではなかったでしょうか。

不変に大学の理念とされる〝真理の探求〟が、果してなんであったか、今深い反省をこめて疑わざるを得ません。

さらに、

真理の探求の使徒としての学者一般に対しても、卒直に言って批判的にならざるを得ないのです。

すぐれた学者、尊敬する学者は数多くいるけれども、またみずからの生活と体面のためにのみ存在していると思える学者のいかに多いことか。その信ずるところに従い、矛盾や悪に対して断乎として所信を貫く反逆の姿勢を示しうるひとがあまりに少ないのです。

きみたちはわかものらしくするどく純粋なひとみを持っているから、そうした先生をすぐ見破ることができるし、したがって信頼もせず、教えを乞うこともしないでしょう。ただ、就職のためには卒業しなければならないから、単位だけはとにかく取っておこうとします。また先生は、そうしたきみたちを見て特別な苦痛を感ずるわけでもありません。

そこには冷たい断絶の関係があるのみで、学生生活はみのり少なく、空虚で生半可な知識だけを詰めこんで卒業していってしまうのです。

私はそんな大学はぜったいにつくりたくありません。

この短い期間にいかほどのことをきみたちに与えられるかは疑問だけれど、ぜひ伝えたいのは、

なにが美しくてなにがみにくいか
なにがほんとうでなにが嘘か
ひとを愛するとはどういうことなのか
人間とはどんなものか
いかに生きるべきか

などといったことにつきると言えましょう。

私は、今ここに〝美〟や〝芸術〟をさぐる大学をつくり、人間的で、わかもの的で、反逆的でかつ真摯な教師たちとともに、きみたちを迎えようとしています。

美を基軸とした人間観、世界観、生きざま論をぶつけ合い、語り合い、はぐくみ合ってゆきたいと考えています。

そこできみにお願いしたいのは、大いに遊べ、そして大胆に試みよ、ということなのです。少年期から青年期に移り変わるその純粋で貪欲な時代に、きみの持つ世界を画然とおし拡げ、さまざまの事象をきみの内部に蓄積してほしいと思うのです。

友との遊び、交わり、おとなの世界への一歩、旅、音楽、文学、スポーツ、さらにきみの得意とする創作上の試み、手をつけたことのない創造への道程、すぐれた芸術家たちとの接触、労働や生活の体験など、目もくらむような試みのなかで、きみという人間をみつめ続けてほしいと思うのです。

そうした体験と観察・自己洞察と反省の数々をこのキャンパスのなかへ持ち帰ったとき、きみの信頼する友人や、尊敬する教師たちはきみに助言を与え、かれらの体験を語り、すぐれた人間としてのきみの生き方を多く示唆してくれるでしょう。

そこでは、きみの人格はこの狭いキャンパスをのり越えて、人間的に豊かに生育するにちがいありません。そこに大学としてのひとつの意義があると考えるのです。

友を求めたまえ—美しきまどいの年代

学生時代というのはよき師を得る時代であるとともに、よき友を得る時代でなければならないと思っています。

私じしん、多くの師と多くの友にめぐまれているけれども、ほとんどが学生時代に得た師と友です。

この人たちなくして今日の自分はあり得なかったであろうと言いうる程、深い連帯感のなかで私は存在しています。

考えてみれば、この短い学生時代、学園はなにほどのこともきみたちに教えることはできず、大学で学んだことが、社会に出たときにどれほど役立つかを語ることは非常にむずかしいことでしょう。

むしろ大胆に言うなら、無限ともいえる厖大な学問の量をむりやりきみの内部に蓄積させるべくけんめいに働きかけるより、同世代のわかものたちがあい寄って、ひとつの共感を持ち合う場をつくることのほうが、大学自体としては大切なのではなかろうかとも考えたりしています。

まさしく学園というところは、きみたちがいずれ知るであろう社会生活における利害得失のいやしさやみにくさが、比較的少ないところであるということができるでしょう。学生は、矛盾や罪悪をきびしく直視する若さ、純粋さを持ち、したがって理想やロマンをかざらず語ることができるのみか、すべての学生が、おたがいへの善意をもって共感しうる、めぐまれた場であることは明らかだと思います。

人間は、ひとりでは絶対に生きていけない、だれもが自分を理解し、昂めてくれる相手を求めていることは厳然たる事実です。

芸術や美の世界は大へん孤高なものではあるけれども、自分の作品を認めてくれる友人があれば、それはどんなに幸せなことでしょう。その友人が多ければ多いほど、よろこびはまた大きいにちがいありません。

多くの友人を求め、語らいと哄笑のなかで、自己を友と比較したまえ。友のこころを理解し、共感しようとつとめたまえ。またかれらのすぐれた部分を奪いたまえ。そしてかれの持つ悲しみや、時として深く沈潜しているかれの孤独を静かに見守ってやってもらいたい—

教師の自己否定—師もまたきみとともに悩めるもの

〝師〟とは一体何だろう。

〝師〟とはまず、きみよりすぐれた知識とすぐれた技術を持ち、またすぐれた感性と理論を持っているものといえます。

そしてきみたちに、自己の考え方や感性についての共感を求めつつ、全人格においてきみを圧倒し、その力を伝えようとするものです。

さらに教師は自分の体験や人間観によって、きみの内部にひそんでいる可能性、たとえば才能とか感性といったさまざまの全人格的なものをひきずり出し、きみにそれを認識させ、きみの特技と個性をきみの意識のもとに置かしめる作業をなすものです。

だから、すぐれた師を持ったひとは幸せだし、かれはその一生を師の影響のもとに生きることになるでしょう。

しかし、そういうすぐれた師であってもその力は果して絶対的なものなのでしょうか。

否、絶対の芸術というものが存在しないのと同じく、絶対の師というものは決して存在しないと私は思います。

まず、その師であることを支える一つの重要なものは、（特に芸術、学問の世界においては）その人が培ってきた「業績」ですが、この業績というものはよほどのすぐれたひとを除いて、いずれ必ずその発展は停止し、また鈍化するものです。

これは、師の才能や体力、頭脳の力によるけれども、悲しいことに一定の時点、一定の年齢になるとどうしようもなく力の減退をきたすものだと思うのです。

業績の停滞と時を同じくして、師の理解力、洞察力も停滞し、あるいは鈍化します。またさらに感性も技術力も以前の燃えるような創造力をうしないがちです。

また、師を培った時代の文化的潮流が一定の爛熟期を迎え、これをのり越えて新しい潮流が台頭し始めると、師はそれを肯定するとしても、その主導的な立場をとることは一般的にはもはや不可能となり、新しい次の世代にそれをゆずらざるを得なくなります。

師は人生と学問の世界のむずかしさをしみじみとかしめながら、みずからの業績を静かに観照し、それを深め、豊かに肉づけし、みのらせることがしごととなります。

そうした師の薫陶をうけてきたわかものたちは、師の偉大な業績をうけつぎ、師によって磨かれた創造力を縦横に駆使して自己を主張し、新しい時代と環境に対応するあらたなる思想の確立をはかるのです。

もはや、わかものたちは師をのり越えようとし、師の創作力に頼ることをしないでしょう。かれらは師の時代は去ったことを感じ、みずからを時代文化の先駆者と感じ、いよいよ後進を導く立場に立とうと考え始めます。

たしかに、時代の創造者たちによって、必ずその師はのり越えられ、先輩は否定されるものだと思います。

それが時代発展の真実の姿だと思います。

ことばを変えて言えば、師はみずからを否定せんがためにこそ、わかものに立ち向かい、わかものを教えていくのだと言いたいのです。

むしろ一刻も早く、自己をのり越えるわかものを育てることこそ、師の師たる道ではなかろうかとも考えるのです。

移り変る時代と環境のなかで自己を確立し、より創造的たらしめようとする師のあり方は、いかにも苦渋に満ちたものであるし、その姿はまさに偉大という外はありませんが、その意味では教師もまたきみたちと同じく一個の学生としか言うすべはありません。

わずか数歩、あるいは数十歩、きみたちより先んじて歩いている先輩とでも言うべきでありましょうか。

もしきみが期すべきものを持ち、創造的たらんとする願いを持っているのならば、謙虚に師のことばを聞き、師の訴えんとすることを誠実に吸収しなければならないでしょう。

青春、ひたすらに生きよ—時代はきみたちのものだ

こうして私は、きみたちにかくあれかしと願う学園の思想を語ってきました。

私もまた、きみたちと同じく私なりの道程を歩いている一個の学生にしか過ぎないのですが、立学に当って、私の日頃考えていることのいくつかを語ったつもりです。

学園は一歩をふみ出したばかりです。

最初に言ったように、これまでの既成の大学のあり方や学生観にはとてもあき足りないし、何よりも多くの大学が性格上必然的に備えていなければならない人間観や世界観、とりわけ理想主義を失っていると思うのです。

青春は必ず次の時代を担うはずだし、それならばあくまで既成の観念のなかに閉じこもらず、新しい時代の創造をめざす活力を、大学は養わねばならないと思います。

たしかにこの時代は頼るべき権威は地に落ち、一国の支柱たるべき青春を養うための、世界へ向っての理念もまた枯渇しているかに見えます。

だから、この学園が新しい世界観や人間観創造のメッカとなり、同時にすぐれた次の時代を導く美の概念を生み出す土壌とさえなってくれたら―

そのためによろこんで私たちは捨て石になるつもりだし、この学園に集う多くの先生も意気ごんできみたちを迎えようとしています。

ロマンを求めてあい語らえる青春、この時代、この現状にあき足りず、迷い深く、生きることに望みを求める青春。

きみたちにこそこの学園に集い、学園とともに生きることを望んでやまないのです。

一九七六年　秋

京都芸術短期大学の沿革

京都芸術大学の前身である京都芸術短期大学は、一九七七年四月に、五〇三名の新入生をむかえて開学しました。主な校地はこの瓜生山の地でした。造形芸術学科のもとに日本画、洋画、陶芸、染織、ビジュアルデザイン、インテリアデザイン、造園、服飾デザイン、そして美学美術史の九コースで編成されました。そのうち「造園」「美学美術史」の二つのコースは、それまでの芸術系の短期大学にはなかった新しい教育体系でした。のちにコース編成は、立体、染織テキスタイル、ファッションデザイン、ランドスケープデザイン、などの名称に改編されました。また、一九八五年には、全国の短期大学にさきがけて映像、コンピュータ・グラフィックスコースも新設されました。このように京都芸術短期大学は、つねに芸術・造形・デザイン教育の最先端をめざしていました。その結果、全国から受験生が集まり、コースによっては本学への入学はとても難関でした。また中国・韓国をはじめアジア各地からの留学生も入学してきました。

開学三年目の一九七九年四月には専攻科が設置され、さらに一九八三年四月には専攻科が二年制となり、「四年制短期大学」になりました。一九九一年四月には、京都造形芸術大学が同じ校地で開学しました。この大学が二〇〇〇年四月に七学科一六コース、定員四四五名に拡充されることになり、一九九六年四月の大学院修士課程や、一九九八年四月の通信教育部の設置もあいまって、重複した教育体系を整理・統合するために短期大学はその任を終えることになりました。そして二〇〇一年一〇月に最後の卒業生九名をおくりだして閉学となり、その輝かしい歴史を託すことになったのです。

建学の理念

京都芸術短期大学の設置が認可される直前の一九七六年の秋、瓜生山学園創設の趣旨に書かれた『まだ見ぬわかものたちに』には学園の新しい出発をむかえるにあたり、次の五つの見出しがかかげられています。〈美しくよそおいたまえ―美とは「心の姿」である〉〈あそびたまえ、試みたまえ―より豊かさを求めて〉〈友を求めたまえ―美しきまどいの年代〉〈教師の自己否定―師もまたきみとともに悩めるもの〉〈青春、ひたすらに生きよ―時代はきみたちのものだ〉。

さらに、一九九一年に起草された大学設立の趣旨は、「この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた。」という文章ではじまっています。そして「科学技術と経済論理によって支配された現代社会は、それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、人間であることの意味を、根底から問われるに至った。」とのべています。

新入生のみなさん、これらの言葉の意味することを考えてください。それがこの学び舎の建学の理念そのものをあらわしています。また学生諸君に求めているものを端的に表現しています。そして芸術をめざすわかものに問いかけている言葉は以下の通りです。「芸術とはなにか」「芸術は戦争を抑止できるか」「芸術は地球上から貧困を根絶する力になるか」「芸術は人類の救世主たりえるか」（二〇一〇年九月・創設者・徳山詳直『三〇年を回顧して―日本の芸術立国をめざす新たな闘いに向かって』）。二一世紀はなお苦難を背負いつつ生きねばならない時代です。途方もない重い課題を人類は担っています。だが希望があります。それは社会をよくし、人の心に希望の灯をともすことができるのは人間だけだからです。みなさん一人ひとりが、未来を豊かなものにするため、建学の理念のもとに学び続けることを期待しています。

吉田松陰像と岡倉天心像

吉田松陰（一八三〇～五九） 幕末の長州藩士で、思想家・教育者・兵学者。みなさんの多くの方が吉田松陰の名前をご存知のことと思います。松陰は思想家であるとともに偉大な教育者でした。二〇〇八年に「至誠館」と「千秋堂」を新築したときの創設者・徳山詳直の言葉をかかげておきます。

私の青春を支えてくれた吉田松陰の像（和田正泰　制作）を建立しましたが、私は二〇歳のときに一冊の書物を通して松陰と出会い、松陰の人を愛する心、弟子たちを信じて未来を託する姿に強く打たれました。そして現代の「松下村塾」をここに造ろうと、大学創設の決意をしたのです。〈中略〉

次代を担う君たちがいる限り、私は希望を捨てず一緒に頑張ることができます。新しい校舎は君たちへの贈り物です。

岡倉天心（一八六三～一九一二） 明治時代のはじめ、フェノロサに師事し、のちに東京美術学校（現東京藝術大学）の初代校長となった人です。天心は米国ボストン美術館の東洋部部長も務めるなど、西洋の美術にも深い造詣がありましたが、あくまで東洋の心をわすれず『東洋の理想』『日本の目覚め』『茶の本』などを著しました。この像は天心に傾倒していた彫刻家、平櫛田中（ひらくしでんちゅう）（一八七二～一九七九）が

写真右：吉田松陰の像
写真左：岡倉天心の像

一九七五年に制作したものです。この金箔のブロンズ像は細部まで入念な考証にもとづいて制作されました。「藝術立国」「京都文藝復興」をかかげる本学にふさわしい人物の彫像といえましょう。天心像は、現在、人間館ピロティに置かれています。

瓜生山の歴史と学園の創設

京都盆地は「山紫水明」の美しい盆地です。この地底には長い年月をかけた膨大でさまざまな堆積層があります。そしてその両端には西山の麓の断層、東側には「花折断層帯」とよばれている長い断層帯があり、瓜生山付近にもその一端がおよんでいます。しかしそれらの断層帯で近い将来、大きな地震が発生する確率は少ないと推測されています。

この盆地の北東、白川が作る扇状地の北側、やや突き出したこの瓜生山周辺は北白川といい、人間が住むには好適なところで、縄文時代以降の遺跡が随所に確かめられます。東に東山連峰がつらなる景勝の地ですから、古くから人びとが生活を営み、いくつかの住居跡や寺院が建造された跡も発掘されています。奈良時代から平安時代初期には「北白川廃寺」とよばれる大きな寺院が、本学の南側あたりにありました。多分その寺院の屋根を葺くためのものと推定される瓦を焼く窯の跡も、周辺で古瓦とともに発見されています。平安時代には、都にほど近いこのあたり一帯は、文雅の地となりました。しかし、室町時代以降の戦乱の時代には、瓜生山山頂に山砦が築かれ、戦いの場となりました。江戸時代に入ると、瓜生山の西麓、現在の本学の中心部に「情延山荘」が当時の豪商・茶屋四郎次郎家の別荘として建てられ、ふたたび都塵を離れたこの地に、文人墨客たちが集ってきました。

近代になっても畑の間に住宅や別荘が立ち並ぶ閑静な土地でした。ここ東山丘陵から突き出た瓜生山は東山三十六峰のひとつであり、京都の市中からみても、ひときわ目立つ山でした。この地が学園草創の場所としてえらばれたのは以上のようなことだけでなく、創設者・徳山詳直の青春時代の心にきざまれた深い思い出が重なっていました。

学生運動がさかんな一九五〇年代のはじめ、混乱した運動のさなか、学友たちとともにこの山で一夜を過ごした徳山は明け方に山を下りながら、将来、平和のために人生を捧げよう、その手段としてここに芸術の学園をつくり、芸術によって平和をかちとってゆく運動を進めよう、と決意したのです。そして一九七七年にまず短期大学をこの地に開学しました。そして学校法人の名を、「瓜生山学園」となづけたのです。この学園が大きくなるにしたがって、瓜生山の名もまた人びとによく知られるようになりました。

この学園で学んだ人びと、この学園で教えた教職員にとっては、瓜生山学園という名称にはひときわ愛着があります。白川通りに面する建物は、以前ここにあった校舎も、そしてそれを受け継いだ現在の建物もそれゆえに「瓜生館」となづけられています。

大学前、白川通りの市バス五系統（京都駅行）停留所のすぐ北方、人間館の地下駐車場の入り口に「滅苦寺跡」という小さな石碑があります。これもやはり平安時代のころにあった寺院の跡です。このようにこの一帯はいつの時代にも人びとが幸せを祈る信仰が息づいている場所でもありました。大学のある北白川地域一帯の歴史や古跡をたずね、昔のことにも思いをはせながら学生時代をすごすことも、よい思い出をつくることになるでしょう。

二〇〇〇年　四月

京都文藝復興

二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、
混沌と汚濁に満ちた世紀であった。
国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、
貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった。
遠く十三世紀末、ルネサンス期に湧き起こった人間賛歌の思想は、
人間の存在を万物の至上におく近代思想となり、
やがて欲望の歯止めのきかない激流となって、
ついには人類自らを生存の危機に追いやった。

しかし、今日ようやくにして、
人間は自らの誤りに気づきはじめた。

果たして人間とは何か。

有史以来人間は、
喜びと悲しみ、愛と憎しみ、希望と絶望に翻弄される宿命を負いながら、
万物のひとつとして、その共生の中で、
生存してきたのではなかったか。

生きるとは何か、生命とは何か、それらを大きく育む宇宙とは何か。

哲学や宗教、文学や芸術表現が追求し続けてきた、この根源的な問題について、
今や良心ある多くの人々が、生涯をかけた探求へと向かいはじめている。
我々はそこに、万物に対する謙虚さと天地自然への畏敬の念に満ちた、
創造的精神の復興の兆しを見いだし、
現代を超克し未来を拓くに至る、たしかな可能性を確信する。

学生諸君、
この時代、この日本の姿を、
きみたちの鋭く純粋な眼でじっと見つめてほしい。

そして
きみたちの先輩が重ねてきた青春の試みの数々と、
何よりも
きみたちの美と真実を求めるいきいきとした心の姿が、
芸術の国日本を再び蘇らせる運動、精神の尊厳を回復する戦いへと
この学園を立ち向かわせてくれることを願う。

きみたちの存在と
きみたちの共感なくして、
学園の未来はありえない。

教育の使命とは何か。改めて問い直したい。

いまや、世代や人種、国境を超えて、
心あるすべての人々と共に、
真実を求め、理想を語り合い、希望を育む土壌となるべき、
新たな学園像をこそ、構築しなければならない。

東洋の思想と叡智を基調とする、
人間精神復興の壮大な実験と冒険に挑む勇気と、
芸術文化探求への絶えることなき研鑽が、
人類を希望ある未来へと導くことを信じ、
学問と宗教、芸術と文化の都、
この京都の地から発する文芸復興の鼓動が、
日本の魂を静かに深く揺り動かすことを願って、
ここに新たな出発を誓う。

二〇〇〇年　四月

大学名の由来

本学園は、京都芸術短期大学から出発しました。一九七〇年代後半という時代において、京都芸術短期大学の開学は、芸術系の短期大学としてはきわめて稀な存在で、全国から注目されました。

一九九一年の四年制大学の開学にあたって、短期大学との連続性をどう考えるかなどについて、学内のあらゆる人びとの意見を聞き、また学外のしかるべき人の意見も聴きました。創立者の徳山詳直は、「京都芸術短期大学」の「短期」を外して大学名としたいと考えていました。しかし、開学当初は定員がわずかに一〇〇名で、学科も芸術学科、美術科、デザイン科の三学科で、造形芸術の分野に限られていたこと、また、本学園が、短期大学としてすでに長年「造形芸術学科」という単一の学科名称で実績を積み重ねてきたことから、「京都造形芸術大学」として、その名のもとに多様な分野を切り拓いていこう、ということになりました。

その後、開学から三〇年を経て、教育研究の対象とする分野はさらに大きく広がり、通信教育課程を合わせると約二万人の学生が学ぶ大学になりました。現在では、多くの在校生・卒業生の活躍に支えられて、芸術全般にわたって多彩な研究・創作活動を展開するに至っています。そして、大学設立三〇周年を機に、大学名を「京都芸術大学」に改めることになりました。

芸術の力で人類の平和に貢献するという「藝術立国」と、古来より日本の芸術及び文化の中心であった京都から世界に向かって芸術と平和を発信する「京都文藝復興」という創学の理念を、学園の内外に一層明確に表明すると共に、その目標実現のために未来に向かってさらに挑戦し続ける大学であるという宣言が、新しい大学名に込められています。

「京都文藝復興」と本学のめざすもの

日本の国を芸術と文化により建て直すこと、つまり市民一人ひとりが芸術と文化を愛し、それらに優れていることを誇りに思い、それゆえに平和で幸福で、他国の人々からも尊敬されるような国をつくることを、「藝術立国」という言葉で表現し、本学の基本理念としています。このことを達成するために京都をまず日本の芸術文化の中心として盛り上げ、京都から日本全国に、さらには世界に発信するという運動が「京都文藝復興」です。

京都は古い歴史をもつ「歴史都市」であり、仏教宗派の多くが総本山をもち、古来の有名な寺社が建ちならぶ「宗教都市」であり、多くの大学が集まる「学術都市」であり、海外から多くの人が訪れる「国際観光都市」です。さらに京都にはさまざまな伝統工芸の職人や芸術家を輩出してきた「芸術都市」としての側面があります。京都市ではこのような京都の特色を「世界自由都市」という名称であらわしています。これら京都がもつさまざまな可能性を再認識し、それらをより有機的に関係づけることによって相乗効果をあげ、かつての京都がそうだったように、日本の芸術文化の中心として再び復興させる運動、それが「京都文藝復興」です。京都芸術大学はこの運動を軸にすえて、社会との連携により教育・学修の成果を高めて社会に貢献する大学をめざしています。

二〇〇七年　新春

藝術立国

平和を希求する大学をめざして

はじめに

わが学園が出発した一九七七年一月一〇日から満三〇年、ここにまた、新たな三〇年のはじまりの年を迎えました。この学園の歩みは「まだ見ぬわかものたち」に向けた言葉から始まりました。その冒頭に私は次のように記しています。

いま、ここに、学園は新しい出発の時を迎えようとしています。

この時にいたって、私は、一つのためらいをかくすわけにはいかないのです。

今日の状況下で大学をつくることの物理的な困難についてはいうまでもありませんが、もっとも大切なこと、―それは、高い理想を掲げ、わかものたちを集める教育研究の場に当る者は、みずから未来への展望と、それを実現させていく深い思想を持たなければならない、集まってくる青春群像にむかって、「かく生きるべし」と堂々と語りかけるものを持っていなければならない、ということです。

新たな三〇年へ踏み出そうとするいま、その志は全く変わっていません。

学園創立の理想は「京都文藝復興」の運動に結実し、いよいよ「日本の藝術立国」を展望できるところまで来ました。

省みれば開学から今日に至るまで、二〇世紀から二一世紀へと移り変わる激動の時代でした。

ベルリンの壁が崩壊し、東欧に民主化革命が起こり、ソ連が崩壊して世界の冷戦構造が終わりを告げました。しかしそれでも、地球上に平和は実現されませんでした。※P137参照

中東やアフリカなど、多くの地域で民族と宗教の闘争は激化の一途をたどり、二〇〇一年には、あのニューヨークの事件が起こり、そしていまなお、世界中で戦争と殺戮が繰り返されています。※P137参照

この間、人口の爆発的増加による貧困と環境破壊は急速に悪化し続け、人類の生存を脅かしています。一九七四年に四〇億人に達した世界の人口は、二〇〇六年には六五億人を超え、このわずか三〇年ほどの間に二五億もの人口が増加しました。

地球資源の消費量において、一四億の人口を擁する中国が、先進国・米国を上回りました。その中国をはじめ、二〇三〇年には世界最大の人口となるインド、さらにその他の発展途上国が米国並みの生活水準に達したとき、地球はいったいどうなるのか。※P138参照

地球が養うことのできる人口は、発展途上国の生活レベルで九〇億人から一〇〇億人と試算されており、明らかに人口の爆発は地球の許容量を超えつつあります。

人類は、叡智を結集して、環境破壊をくい止め、貧困を根絶して幸せを得るか。

それとも地球の資源を消費し尽くし、戦争と殺戮を繰り返しながら、滅亡への道を辿るか。

次の三〇年は、間違いなく、人類の生存を決することになります。

そう考えるとき、我々がいま進めている芸術の運動にこそ人類の未来がかかっている。「戦争と平和」、「戦争と芸術」の問題をどこまでも訴え続けていこう。これまでもそうであったように、これからもこの道を一筋に進んでいこう。そういう決意が、改めて沸々と湧きあがってきます。

学園の現状とわが使命

わずか一七五人の入学定員から出発した学園は、三〇〇〇人の若者たちが集う芸術大学に成長しました。

さらに通信教育の運動は一〇年目を迎え、六二〇〇人の社会人が学ぶまでになりました。言うまでもなく、わが文藝復興の運動が全国に大きく展開できるようになったのは、通信教育の成功に大きく与っています。

やはり開学以来取り組みはじめたこどもと母親のための図書館の活動から「こども芸術大学」が生まれました。来年度からは四〇組八〇人の母と子が学ぶことになり、その活動も軌道に乗ってきました。

兄弟校である東北芸術工科大学は、昨年一五周年を迎え、大学経営にとってはまことに厳しい東北の地で、「東北ルネサンス」を掲げて見事に闘っています。

東京に設立した日本文化藝術財団は、現代文明に背を向けて生きてきた人々、あるいは現代文明と正面から対峙して生きてきた人々、そうした人々に光をあてる活動を続けて、着実に地歩を固めてきています。

東京を中継して京都と東北を結び、世代を超え地域を超えて、良心ある人々とともに、「世界平和を希求する大学」としてさらに力強く前進していくための基礎が、確かにでき上がってきました。

そして何よりも心強いことに、わが学園には、若い優れた人物が数多く結集してきています。特にここ数年、多くの優れた人物を発掘することができました。京都でも山形でも、後に続く若い世代が生まれてきています。

その世代が存分に力を発揮できる体制づくりに寄与することが、理事長としての最大の使命だと認識しています。

新たな三〇年の展望

一、世代を超え、地域を超えた芸術運動をめざす

平和を求める芸術と文化の運動を、いかに世代を超え、地域を超えて、日本の隅々にまで浸透させていくか。それがわが学園の命題です。

日本全体を包み込みながら、世界へと広がる運動をさらに大きく力強く展開していかなければなりません。

（ア）通信教育―社会人とともに

通信教育は、文藝復興の運動を日本全国へといきわたらせる血流となって、学園の大きな柱に成長しました。この通信教育によって、多世代、多地域に開かれた新しい大学の展望が生まれました。この通信教育をさらに発展させることが、文藝復興の運動強化につながることは自明です。そのため、二〇〇七年から出発する通信制大学院の充実を進めながら、学部教育をいっそう充実させることが必要です。

年々拡充を続けている東京サテライトキャンパスの再整備に着手し、その上で、東京だけでなく、それぞれの地域における学生たちの活動を支援する「地域の拠点づくり」を進めます。

また、「こども芸術大学」の展開と歩調を合わせるかたちで芸術教育士の養成をめざすコースの設置や大学院の分野の拡充、さらに多くの人々が芸術に触れる機会を増やす教育の仕組みづくりなど、社会人の希望に沿う新しい通信教育の展開をめざします。

（イ）「こども芸術大学」―こどもと母親との連帯

「こども芸術大学」の開学により、わが学園は、人間形成の基礎となる幼児期の芸術教育の第一歩を踏み出しました。今日のこどもをめぐる社会状況を見ると、こどもと母親のための芸術運動なくして文藝復興の更なる展開はありえないことが痛感されます。

「中南米やアフリカや、こどもたちが苦しんでいる国々に、この運動を広げてほしい。」在校生からそう要望されました。それが実現する日が必ず来ます。

東北芸術工科大学の「こども芸術大学」と連携して教育内容の充実に努めながら、その運動の全国への展開をめざします。さらに「こども芸術学科」において、こどもと芸術に関する探究を進めて原理と方法の確立をめざしながら、こどもと母親の教育にあたる若者を育成し、より強固な展開をはかります。

（ウ）一貫した芸術教育の体系に向けて

わが学園は、一八歳から二〇代の若者たち、社会人、そしてこどもと母親が、共に学ぶ大学に変貌を遂げました。しかし、六歳から一一歳までの児童、一二歳から一七歳までの生徒たちに、我々の芸術運動をどう広げていくか。幼児から社会人に至る一貫した芸術教育の体系は、どうしても取り組まなくてはならない課題です。

今後、こども芸術学科を中心とする教育研究の成果や、「こども芸術大学」の活動、高校大学間連携の取り組みなどを糸口にして、東北芸術工科大学が展開する「全国高等学校デザイン選手権」の成果にも学びながら、その課題に取り組みます。

二、京都と東北を結んで日本の復興をめざす

振り返ってみれば、敗戦後の焦土と化した日本を見て、民族の歴史と文化の源流をたどり、日本人の魂の故郷を明らかにすることこそ日本復興への道であると考え、私たちは大学創設を決意しました。

そして、日本文化の中心である京都に焦点をあて、その志を実践する新たな芸術文化運動を「京都文藝復興」と名づけました。

しかし、短期大学を発足させ、新たに大学をつくり、芸術と文化の運動を通して日本の魂の故郷を求めていくうちに、京都が日本文化の中心となる以前、日本はいかなる姿であったのか、という疑問が湧いてきました。弥生の向こう側にあるものは果たして何か。

その疑問に背中を押されて、東北の大地を歩き回りました。そして、東北こそ日本に残された最後の「母なる大地」であり、現代文明の過ちを克服するための最後の砦であると確信したとき、この大地に大学をつくり、東北と京都とを結んで、縄文から弥生に至る深い歴史の底から日本のあるべき姿を探求する運動をはじめようと決意しました。

それが、東北芸術工科大学の出発点でした。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学は、それぞれ特色のある自立した運営をはかりながら、共通する理念のもとに連携して事業を行ってきました。

二〇〇〇年：単位互換制度を制定
二〇〇一年：東京サテライトキャンパスを共同開設
二〇〇二年：交換留学制度を開始
二〇〇三年：韓国事務所（ソウル市）の共同運営を開始
二〇〇五年：「こども芸術大学」を両大学に開学
京都造形芸術大学「世界アーティストサミット」と東北芸術工科大学「全国高等学校デザイン選手権」との協力連携を開始
二〇〇六年：「東アジア芸術文化研究所」を開設（京都造形芸術大学、東北芸術工科大学、韓国・弘益大学校の三大学共同事業）

日本のあるべき姿を世界に向かって示していく道は、東北と京都、縄文と弥生の文化を一直線に結ぶ姿を描き出す運動にあると確信しています。

「こども芸術大学」の同時開校は、両大学に共通する理念を鮮明に示しました。

京都と山形を結び、蓼科の附属康耀堂美術館や東京の日本文化藝術財団を中継し、通信教育部生や卒業生たちの協力を得ながら、全国に「美術館大学構想」の理念を広げていくことも夢ではありません。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学の二大学連携による全く新しい大学運営の姿を示しながら、芸術による日本再生の運動を確実なものにします。

三、東アジアと連帯し平和をめざす

朝鮮半島では、世界を揺るがす事態が起こりつつあります。

昨年、北朝鮮は核実験を行って、世界中から非難を浴びました。しかし、考えてみれば、アメリカこそが世界最大の核保有国家です。しかも、人間の上に核爆弾を落とした経験がある国は、唯一アメリカだけです。そのアメリカは、

いまなお一万発の核弾頭を保有しています。世界中でロシア、中国、フランス、イギリスなど九ヵ国に合計約三万発、地球を三〇回以上破壊することのできる核弾頭が存在するのが現実です。いままたイランに触発されたアラブ諸国が、核拡大競争に奔走しはじめました。

このとき、なぜ大国が核廃絶の先頭に立たないのか。

幸せを求めながら憎み合い殺し合う人間の愚かさが、平和を妨げ、地球を脅かしている。

南北ベトナム、東西ドイツが統一を果たしながら、朝鮮半島ではいまも、民族と国土の分断状態が続いています。半島全土が焦土と化す熾烈な戦争を経験し、五〇年を超える歳月を経て、なお分断の中にある民族の苦しみを、我々は、どう受けとめるのか。

そして、民族統一への悲願を抱く韓国・朝鮮の人びとと、いかに手を携えていくのか。

朝鮮半島の対立と緊張が解かれ、朝鮮民族の分断と悲しみの歴史に終止符が打たれてこそ、東アジアの連帯と平和への道が拓けます。

そうした東アジアの現状を考えるとき、中国の存在が大きく浮かび上がってきます。

中国は、世界政治において大きな影響力を発揮するようになってきました。その動向は、東アジアの命運を決定的に左右します。

東アジアの中の日本は、中国とどう向き合い、韓国とどう手を組んで、危機を乗り切っていくか。

その問題の解決を見出すために、東北芸術工科大学、韓国・弘益大学校との共同により、「東アジア芸術文化研究所」が設立され、いよいよ活動を開始します。この活動には、延世大学校や梨花女子大学校など、韓国の他の有力大学が加わります。さらに中国とも共同していきます。

日本、韓国、中国をはじめとする東アジア地域の伝統及び現代芸術文化の研究、芸術文化の交流史研究、そして教員・学生間の実際の学術交流を通じて、人類の危機の時代に、「東アジアにおける平和の問題」あるいは「芸術と文化による民族連帯の問題」に挑みます。

四、芸術の創造力で社会の変革をめざす

芸術を学ぶ若者に、人類危機の時代を克服しようとする強い意志をどう植えつけるか。他者の痛みに想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう養うか。困難な問題を解決し社会を変革する創造力をどう身につけさせるか。すなわち、芸術家魂をもった若者をどう世の中に送り出すか。文藝復興とは、文藝復興を担う人間の育成にほかならず、それこそがわが学園の最も重要な使命であることは、言うまでもありません。

そのために、さまざまなカリキュラム上の改革が進んでいます。学生たちの活き活きとした姿を頻繁に眼にするようになりました。学園の理想は、次第に学生たちに浸透しつつあるように見えます。

この改革を強く推し進めながら、同時に、人類が直面する困難な課題を克服する鍵は人間の「想像力」と「創造力」にあることを、強く社会に訴えていかなければなりません。

この大学で学んだ学生が社会の中に活躍の場所を獲得してはじめて、大学は教育機関としての役割を果たすことができます。学生の活動を、全力をあげて支援し、若い「創造力」を社会の変革に役立てることのできる体制構築をめざします。

五、芸術運動の理想と哲学を探究する大学

芸術の立場から「戦争と平和」の問題をどう捉えていくか。
この世界の状況をどう認識するか。
その理想と哲学を学び伝えることが、基本です。
理想なくして大学は存在できず、また、依って立つ哲学なくして芸術の運動は存在しえません。

美とは何か。愛とは何か。

人間とは。そして、生命とは—。

もう一度繰り返しますが、大学が出発して三〇年。わが学園にとって、これまでは闘う基盤づくりでした。
しかし、いよいよこれからは、大学の死命を決する三〇年になります。

ヨーロッパ・ルネサンスが起こった時代、世界の人口は、わずか四億人でした。地球は無限であり、人間の可能性も無限だと信じられた時代に、ルネサンスの運動が展開され、人間を万物の至上におく近代へと続く歴史の基礎となりました。しかしいまや、地球は有限であることが明らかになりました。
我々の「文藝復興」は、近代を支えた「ルネサンス」とはまったく似て非なるものです。

地球は有限であるという認識を基盤に、芸術と文化による人間精神の復興と世界平和をめざす新たな運動こそ、我々が提唱する「文藝復興」の運動なのです。

芸術とは何か。

芸術は戦争を抑止できるか。

芸術は地球上から貧困を根絶する力になるか。

芸術は人類の新たな救世主たりえるか。

「平和を希求する大学」としての旗幟を鮮明にし、後に続く世代を信じて、命のある限り闘っていく決意を新たにしています。

二〇〇七年　新春

「藝術立国」がめざすもの

「藝術立国」とは芸術をもって国を建て直すという考え方です。別な言い方をすると、芸術と文化を愛し、それに優れていることを一人ひとりが誇りに思い、それによって他国の人々からも尊敬されるような国をつくりましょうということです。

明治以降、とりわけ第二次大戦後の日本は、欧米の先進国を手本として急速に近代化を推進してきました。その目標としてかかげられてきたのは、「経済立国」であり「科学技術立国」でした。つまり、科学技術を発展させることにより、新たな産業をおこし、その結果、経済的に豊かになることを戦後復興の目標としてきたのです。そしてその目標は一九七〇年代にはほぼ達成され、八〇年代後半から九〇年代初頭のいわゆる「バブル期」には世界で最も経済力のある国の一つと評されるまでになりました。しかしその一方で自殺者が急増し、九〇年代末になると年間三万人を超える数になるなど、国民の一人ひとりは決して幸せとはいえない社会ができあがってしまったように思います。

二一世紀に入ると世界的に社会の情報化が驚異的に進行し、人々の生活は格段に便利となりました。またグローバル化という言葉に代表されるように、人と物の行き来も格段にさかんにできるようになりました。しかし他方では世界各地で紛争や残虐な行為も多発し、日本でも格差と貧困が大きな社会問題となっています。また核兵器廃絶の見通しは見えず、日本でも核物質の処理の見通しも立っていません。理由のない排他主義的言動やヘイトスピーチが人々の心を蝕んでいます。

ではどうしたらみんなが幸せな気持ちで暮らせる国をつくれるのでしょう。もちろん経済的な豊かさや科学技術の発展は必要です。しかしそれは必要条件ではあっても十分条件ではないように思われます。人々が豊かになるためには何よりも社会が平和であり、人々の心が豊かでなくてはなりません。そして芸術や文化こそが普遍的な人間性を育む基盤となるのです。

幕末の「開国」後、日本を訪れたアメリカ人は、どれほど貧しくとも人々が礼儀正しく、どの家にも床の間に花や軸が飾られているのを見て、その文化度の高さに驚嘆したといわれています。これからの日本も、経済や科学技術だけでなく、芸術や文化においてこそ豊かで市民はそこに誇りをもち、それゆえに他国から評価され尊敬されるような国にならなければならないと思います。それが、本学のかかげる「藝術立国」の目標です。

御堂「天心」

瓜生山学園がある丘の高みには吉田松陰の像がたち、人間館の正面には明治のはじめに日本の芸術の粋を研究して世界に紹介した岡倉天心の像がみなさんを迎えています。それと並ぶもうひとつのモニュメントが興心館の前にある御堂「天心」です。ここに鎮座する仏像は京都・岩倉の大雲寺にあったものですが、天心がその素晴らしさを称揚したのではないか、と考えられているものです。この石仏は四面体で、正面は密教の最高神である胎蔵界大日如来であり、右面は阿弥陀如来と観音・勢至の両脇侍、左面は釈迦如来、そして背面には十一面観音が刻まれています。その独特な構成と優美な表情の石仏は、鎌倉時代後期の作とされています。学園の創設者・徳山詳直は「この世の中に、神や仏のような、有るか無いかは分らないけれども、必ずや人類を救ってくれる、そんな存在がどうしても必要です。それが藝術立国の志だと思っています」とのべ、この地に御堂「天心」を建立しました。

御堂「天心」

通信教育部の創設

学園の掲げる理念「藝術立国」の実現に向けて通信教育部は誕生しました。高齢化、人口減少化の進む現在の日本において、これまでの社会構造や価値観に変化が生じています。それに伴い、過去のキャリアにとらわれず多くの人々が「生涯学習社会」のもとに充実した人生を求めるようになり、他方、若年層にとっても社会人であることにとどまらず、自らを更新するための「学びの場」が求められるようになりました。本学はそれらの声にこたえるべく、「高等教育機関としての学部（学士課程）、大学院（修士課程）」を開設し、体系的なプログラムをもった教育システムを提供することで、すべての世代がそれぞれの居住地において生涯にわたって芸術を学び続けられる環境の実現をめざしました。芸術教育の基本は、各人が自己と向き合い、自らの表現を追求し、その思想と技能を高めることにあります。「自発的で柔軟な学びの尊重」という通信教育の利点は、芸術の分野において最大限に生かされると考えて、全力をあげてカリキュラム体系の整備、教員態勢の確立、教科書・教材の作成などに取り組みました。

その結果、一九九八年に通信教育部を開設、二〇一三年度には芸術教養学科開設により、インターネットを利用した遠隔授業だけで卒業できる仕組みの提供を開始しました。その後、二〇二〇年に開設した学際デザイン研究領域では、大学院においてもインターネットを活用した遠隔での研究指導だけで修士の学位取得が可能となりました。

現在も全ての学科、領域で遠隔教育の拡充を行っており、二〇二一年のイラストレーションコース、二〇二二年の書画コースと制作系の分野においても遠隔授業のみでの卒業が可能なコースが新設され、以降映像コース、食文化デザインコース、音楽コースが開設されています。また、大学院においてはすべての領域が遠隔での研究指導で学べるよう改編されました。

二〇二五年度には、学士課程・修士課程を合わせて約一万八〇〇〇名の学生が芸術学科、美術科、環境デザイン学科、芸術教養学科、文化コンテンツ創造学科、そして大学院で学んでいます。